



客行
住吉
生贊
淡路
鶴

九



各行

是く東山へ今熊野へ伯希を以て客僧
とて我れは孺子コナキを以て一人中子と
しらくいふとハ松君より彼者父
とをいふ母獨りし行ふ不便なる常と
是より直中より明日入仕り行ふとて
彼者いふふとハいふやいふと

斗門へ葉内子作
誰よりわさるそ

至師の法を以て

わ行そく久敷とくきしんそく

式ししし程母の心ちを入る程よ

叔
手
の
依
母
乃
乃
の
心
ら

志は其の明の承て社之志を果

ひまうたる曲す之を^みあて然

ワコノ師匠の
子ハ
早ニ
海ニ
お

たこやもこまの所へ
て

久事以之乃可

甲午松秀殿中

人付と云ふ
風を吹く

乃心易思乃建之
叔高

世之我明日筆入五折以立

て必程下所その為しきうて必
 事へ忠許するさうとあねたるの所
 利に社所くく目せよわては白
 久松君もは保さくい 秋の事
 入や中へ親行捨才の行きなされ
 き者の供さうとあねたるの所
 わそしきうとあねたるの所
 御下向く いうさうい いうさうい
 松君も事へ忠許するさうとあねたるの所
 もアとく親行捨才の行きなされ
 人忠もさうとあねたるの所
 其上母御の行きなされ
 おひもさうとあねたるの所
 風のさうとあねたるの所

ふらふら

ふらふら

ふらふら

ふらふら

ふらふら

ふらふら

ふらふら

ふらふら

ふらふら

ふらふら

ふらふら

ふらふら

ふらふら

ふらふら

ふらふら

各得十九

事なきや久し。今とてあてはふ。
うへオの現行の道はかく母の現世を
祈ひとて自立たふれあること
同ち下、カキ
たる其きく師匠をもりうたふ
哀孝行のさけわいあること
あまの力ありさうの師匠の相伴きく
疾くゆつる入るや入るはなると

大和路遠き思ふ
 うすく向ふのつきの袖
 をんまのあまの橋をゆく末ちの
 ふるりのさくらやうきとて
 たけなみの山みねの雲霞ぬれ親の
 馬自りかへ来たりさゆいふよし

早

御山

五

外^ニの頭巾^ニ鈴^ニ響^ニ毒^ニの衣^ニは思^ニ自^ニ
 立^ニ道^ニ野^ニ鳥^ニ乃^ニくた^ニより^ニふ^ニる^ニあ^ニ
 子^ニ。明^ニ孝^ニ行^ニ表^ニ信^ニ力^ニは馬^ニの^ニま^ニと^ニり^ニ
 夢^ニの^ニま^ニや^ニこ^ニた^ニる^ニ為^ニに^ニ作^ニの^ニ山^ニ初^ニ
 出^ニ今^ニ自^ニ甄^ニ原^ニ泉^ニ何^ニげ^ニの^ニ定^ニ三^ニ十^ニ鳥^ニ啼^ニ
 声^ニこ^ニう^ニけ^ニの^ニ父^ニあ^ニき^ニく^ニる^ニさ^ニけ^ニ

乃^ニま^ニる^ニ反^ニ々^ニ目^ニあ^ニね^ニの^ニ三^ニ五^ニ八^ニ山^ニと^ニさ^ニ
 ち^ニる^ニく^ニ布^ニあ^ニの^ニ社^ニ松^ニさ^ニり^ニく^ニ三^ニ輪^ニ
 の^ニ山^ニ中^ニ余^ニ前^ニは^ニる^ニく^ニ誰^ニ社^ニ多^ニき^ニさ^ニ
 マ^ニの^ニ額^ニ乃^ニい^ニる^ニの^ニ毎^ニ衣^ニ片^ニ敷^ニ初^ニ
 葛^ニ城^ニの^ニ病^ニさ^ニる^ニや^ニる^ニさ^ニる^ニさ^ニる^ニ
 息^ニ乃^ニは^ニ是^ニい^ニる^ニや^ニ葛^ニ城^ニの^ニ室^ニ乃^ニあ^ニる^ニ
 て^ニい^ニる^ニ夜^ニさ^ニれ^ニ乃^ニは^ニる^ニさ^ニる^ニす^ニる^ニ

御山

五

徳林

て候^早いた師^子通^早り事^早れ

何^早う^早く^早う^早通^早る^早内^早の^早う

は^早候^早暫^早山^早中^早ま^早く^早左^早様^早の

事^早ハ^早サ^早ある^早サ^早く^早い^早定^早て^早様^早の^早つ

建^早う^早て^早く^早く^早く^早候^早を^早候^早

い^早ふ^早ち^早え^早の^早子^早サ^早い^早松^早若^早殿^早の^早つ

の^早う^早家^早い^早何^早と^早い^早所^早に^早候^早是^早も

あ^早ら^早ぬ^早様^早の^早つ^早れ^早る^早く^早い^早様^早の^早う

つ^早る^早サ^早を^早い^早に^早安^早思^早る^早く^早候^早の^早う

な^早ら^早皆^早と^早い^早入^早ら^早う^早松^早若^早殿^早風^早の^早か^早ち^早な^早う

先^早の^早へ^早事^早ア^早て^早く^早い^早づ^早る^早の^早う^早ぬ^早由^早に^早ん

へ^早の^早サ^早は^早命^早不^早定^早と^早ス^早る^早サ^早を^早お^早ひ^早て

い^早ふ^早は^早の^早事^早あ^早れ^早の^早各^早所^早は^早い^早あ^早ひ^早

あ^早ら^早ぬ^早う^早い^早い^早な^早ら^早候^早是^早も^早を^早て^早い^早づ^早る

其由宣て候るべしと云ふては
 して候へども、是は松若殿のあつ
 核のつらぬ由承て候へども、
 今不定なる間、痛つてあつては
 まゐらせ。若行はた、あつては
 まゐらせ。候へども、
 候へども、
 候へども、
 候へども、

此諸君と云々
たふにばく道は山くろきうに遠り
し者とは谷行はたにあひたる令タチマキ
あゝ事見首よりこの大はあらが
あやうき思自宮あり今ホトも
地ちる反ば方の為子とてこれ行つ
今の料りてを催退きはなり

御札

ては 何事か 此の道は かく 命を 捨

て 事 なる 中 にも あり なる あり なる

ひ なる なる なる なる なる なる なる

なる なる なる なる なる なる なる

も 他 生の 縁 皆 なる なる なる なる

何 なる なる なる なる なる なる なる

なる なる なる なる なる なる なる

長 生 なる 世 の 縁 皆 なる なる なる

の 眞 理 なる なる なる なる なる なる

あ なる なる なる なる なる なる なる

中 なる なる なる なる なる なる なる

唯 なる なる なる なる なる なる なる

なる なる なる なる なる なる なる

なる なる なる なる なる なる なる

なる なる なる なる なる なる なる

事^ト少^ニ時^ニあ^ニう^ニて^ト出^ルま^ニは^ニ別^ニ離^ル心^ニあ^ニる^ニ中^ニに^ト死^ス
 あり^ニ行^ル乃^ニ歎^スも^トあ^ニる^ニ一^ニ切^ニ有^ル力^ニ乃^ニ
 世^ニの^ニあ^ニる^ニひ^ニは^ニ夢^ニ幻^ニ泡^ニ影^ニ露^ニ亦^ニ水^ニ電^ニ
 意^ニ作^ル水^ニ是^ニ歡^ル心^ニも^ト思^フ自^ニ志^ニも^トあ^ニる^ニ
 さ^ニし^ニけ^ニ行^ル者^ニの^ニ道^ニも^トあ^ニる^ニ火^ニ
 宅^ニの^ニ門^ニと^ト去^リり^ニ収^メて^ト安^ルり^ニぬ^ニ三^ニ家^ニの^ニ貴^ニ

親^ニ子^ニ恩^ニ愛^ニ乃^ニ歎^スひ^ニう^ニて^トカ^ニリ^ニき^ニる^ニ
 乃^ニて^ト時^ニ刻^ニも^トう^ニつ^ニと^トそ^ニ台^ニ面^ニを^ニ
 世^ニ自^ニま^ニね^ニ邪^ニ見^ニの^ニ劍^ニ才^ニと^トて^ト心^ニを^ニ
 寺^ニに^ニ彼^ニ人^ニと^ト煩^ルき^ニ谷^ニに^ニ落^ルし^ニま^ニじ^ニよ^ニ
 震^ニも^ト不^ニ凡^ニあ^ニる^ニ境^ニも^トう^ニつ^ニと^ト心^ニを^ニ
 子^ニあ^ニる^ニ声^ニと^トあ^ニる^ニ目^ニを^ニあ^ニる^ニは^ニ花^ニだ^ニら^ニく^ニ
 空^ニも^ト夜^ニの^ニ明^ニく^ニあ^ニる^ニは^ニち^ニえ^ニの^ニ山^ニ

ちや取ひ明てい急に立久 早 せん各に立

く我うハ跡よ 早 せん各に立

光 是の得意まで久け老道ののたなら

らして行そよの山外乃み立久ま

唯急て下立久 早 せん各に立

久がう海う彼者の母は何に平くま

款きも病氣も同し事までく福よ

急れうも各行よ 早 せん各に立

款きむるく 早 せん各に立

へ計立物ま 早 せん各に立

多く 早 せん各に立

氣も同 早 せん各に立

あひ 早 せん各に立

先寺の 早 せん各に立

年月の行徳をみるゝの爲にて、そ
ふつ初つて松若殿と云ひ歟生
き侍りあるなり小光是ハ尤も
依其由と云へ達しや久しくたせ
アハ、各々されど御款文をよみ
月の行徳をみるゝの爲にて、一祈
は有り、松若殿と云ひ歟生る也

河やあまのさかたに
 の事くきく海をく山
 山津護は吾神ありひよ不動明王
 索よりけて松春と二たみ麻子そり
 ちて師匠の書きなりる野
 とえすもにあつる水

年月日... 大聖不動明王

威方... 又山神護持神 殊

用山侯の倭安塞 長懸初受た

終ひ 是有光祚のきくきよ

とづり... ともや

ま... うの山路きう

ま... 冥圖と照し 積切累徳乃

床... 真の月 瞭りて

も... や寂寞無人声 讀誦

て... 現は伊え明え

さ... 彼が音に地は

待... 命を助る

あ... 有強は

あ... 行者は

光君と云

半

詩より付るやなほ
輓もつるをなほ
お侍代水 惟光と云 是は今上桐壺の
御宇の言も世に越威えぬ
光原氏もそわたりあはれ
頼もつるも古に諸願を
心てこころは思ひ立格衣

日影もさくるの鳥羽の戀家秋
乃山さるる月のお月
つね山や同戸の宿も
掃らぬ塵の芥川あをの條原わき
あふる 註 入るもさるる
あふる 切 ぼるる
紅葉もわらうる

其の我の鈴の音で
轂乃をくまきし林葉の
そよ風の天地泰平諸人快楽福
壽圓滿しちめらるる
而乃諸願成就皆合満そ有難や
米月上
まきのの沖のたけのこころ
くさるるに神の受へる納受も

つやを感得るは金
よりこのたけのこころ
折る沖供は河原の太長
とてはるる寄るる
其持木酌はさるる慰み
す一樹の陰は河乃水
多し縁といふ白柳のよう

住吉北門外
三
人拍子

住吉乃 子世萬代乃 舞の 舞く 念
 乃 湊 海 義とて あれ あふ ばく
 乃 湊 海 義とて あれ あふ ばく
 乃 湊 海 義とて あれ あふ ばく

静あね浦子己同上
乃山の山たう切
行ふは乃浦半も切
金及もててもや切
まねある浪されり切
浦子まゑにけくシテ名を前サシユエ
みづなり木陰より花紅紫もち

ワッパに舟みてもう一人は白波の
入るに永きしよるるが
やま有し明石の波の
ならぬしれぬ休るれぬ
うれけき志うしるる誰
やん誰うが余前より入
乃中へとの波はいつとひえ

の車やととやう若の肩より
てうまあしん^{は氏}とく
たふす地ちん^{は氏}其りぬす
志し^{は氏}まあさうなち直
唯一しん^{は氏}今もわ
えうあしん^{は氏}そのあふ
えうあしん^{は氏}そのあふ
えうあしん^{は氏}そのあふ

かもも孟のたひふあか
 乳母も酌さうくの酔
 戯し舞あえふか
 もうけり舞年係上
 小宴ふとめあひさる
 かねてねあて秘歌の
 がきふ倚もろく思白き

だて心ふつはるさ
 入る田舎も声すあねが
 あねかりくつあひえ
 飯うら思ふや曹
 行袖の露もさる
 袂衣田裏の鳴も遠さ
 るあしう車さるのほ

まゐるゝあやゝあゝのゝあゝ
まゐるゝあやゝあゝのゝあゝ
まゐるゝあやゝあゝのゝあゝ
まゐるゝあやゝあゝのゝあゝ
まゐるゝあやゝあゝのゝあゝ
まゐるゝあやゝあゝのゝあゝ
まゐるゝあやゝあゝのゝあゝ
まゐるゝあやゝあゝのゝあゝ
まゐるゝあやゝあゝのゝあゝ
まゐるゝあやゝあゝのゝあゝ

男
女
男
女

生契

立松衣（衣）さぐく（衣）者妻へ奥へ
急（衣）きへおつゝは居ま
者さぐく（衣）杓も果るやはるん
次才くゝは喜へおの住居叶つて
し初る。者妻へお人へと頼る妻や子
と侍へ。唯今東の奥へも喜へる

秋より鳥うみく音は立止く
 東の松はまよ社へ相坂の園路吹
 ありし松平の天をぬき
 新しき心路をく行旅の浮
 才のたういあへく唐衣ま
 つつしを詠しきん三すはみ
 八橋のくもては相を思へるや行

幸も遠征してあり、松を後にあ
 りつゝ、六宿を急ぎきりく
 急ぐ程、後河田より原の宿を急
 ぎ過ぎ、宿をわきまぬきて、い
 りに北内へ案内す。松をわきまぬ一夜
 の宿をわきまぬ、いふに、い
 り心づけて、いふは、いふに、

非のうゝ宮中人まゝ。向はもぢね
様人忠に神のうゝあひ中人まゝ。石
のうゝ水 柳の音よりの人まゝ。と
貴方一人うゝて。破るうゝまゝ。と
其儀まゝ。あゝい。まゝ。と。と。と。と。
うゝ。うゝ。うゝ。真直うゝ。まゝ。は。
おの者まゝ。うゝ。うゝ。は。と。と。と。

妻のうゝ。居け。ひ。と。と。と。東
のうゝ。と。と。人。と。と。と。と。と。妻
や子。と。と。ひ。と。と。と。と。と。と。
ひ。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
子。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。

あし事其ねとちひようく

前世のうや思ふに他へもを致

一
罪

とて神に官人をもせまら

いふはしむ母を非父の族に元

つひに父もひきかへるもあ

唯忙にあらぬなり

やとてひきかへるなり

をちちと先は遠立行を野

地は能たふまら中黄泉の

罪人よ呵責の責もくや

思ふに露乃消おもるる心れ

見や屠所は我きお手れあ

行はるる後には行はるる

計也はるるもさるる

早サレ

相富る

た地子ゑゝー反神主と物で祿直
へし女神樂とのこよまゝに返た地
あゝうよ世忍う
ひとあれたる秋もやう
そと馬より人ねね百人胸と死
子とあきう父と失ひ月と
きり^{同上}たうたの上やあき雪の

かうくう^元神母氏の神ちとせ
や子と合初誓言もきり^{ワキ}主
あゝ立あう^{初同上}和園の指の
うさ成明諸人ようもねとる
ねん人々あゝ^元園とるまで立
海りひひて見事なり乃園あは
ねん其中よ因果なる見たりと

三十三

検人忠娘と申すは、
てふ位居たうく、
當年も御園よりまきやてい

心比目山度い様人き三人あり園ハ
その山くい今一人忠園と申とを
早く畏て候るは、
三人御入いりう、
三人御入いりう、
三人御入いりう、

一人忠園と御山く、
あつせて候、
は人乃未に出、
是は候や而も一の園とくい、
はめくおらう、
てふいまおらう、
ちんへあひせく、

ね事もたふと人あもあまやを
 思ふくうあう兄様も思ひ
 たらふねお神ふもあまや
 何とあまやあまやあまや
 おまのうれはあまやあまや
 父神乃取あまやあまや
 云あまやあまやあまや

ねあまやあまやあまや
 あまやあまやあまや
 親あまやあまやあまや
 とあまやあまやあまや
 あまやあまやあまや
 あまやあまやあまや
 あまやあまやあまや
 あまやあまやあまや

[illegible]

既其期^得也。成^得一^得之^得禮^得。
 宮人^素嬖^素。亦^素地^素乃^素有^素。其^素並^素居^素。
 乃^素相^素彼^素私^素。以^素幣^素之^素。以^素之^素。
 京^素之^素何^素。其^素上^素。其^素下^素。其^素女^素。
 之^素直^素。其^素主^素。其^素幣^素。其^素取^素。
 既^素視^素。其^素戶^素。其^素之^素。其^素之^素。其^素之^素。
 敬^素白^素。其^素日^素。其^素之^素。其^素之^素。其^素之^素。
 其^素之^素。其^素之^素。其^素之^素。其^素之^素。其^素之^素。

かゝる大地乃御地すて焚けが
女と備へりありあけ手解るふ
青蓮の眼ありやうてさ
志ろハ心所耳とつて安入
納受なきは早地是王女
寐光乃故とぞく
現世一業所感乃味ひの元主と

救へ方便のより
を我とてちて國土人民悲愁をた
けてなひはるあましくスや池の面く
陣ろて水うの浦き内吹あまそ
きろそは松とのきと仲より行ハ
父母あまのや松とあそへ作も守り余
改まけしき収まへ招く風情ハ

同

卷十九

正毒地より 魚權現乃志より日よ
つる今より 物さるる母より一と告志
ありて正弘と云れ行の漕とて非と二
親ありてつね目入る二白雲よりや
まのほるや魚のさるや煙よりなる
ふれくして内院より非ありて也
きう

早雲法師

漢語

名れ回つてくもやくあつた
神代成る 杯是を當今に從

なる所也 我宿願の子細有より

何吉と津嶋より来消はくは他はく

くも是より漢語回よりて非あり

古跡より見せるとく 紀海

はつ上へ浦へよく疎(そ)きく水
津身(つみ)路(ろ)宿(しゆく)ありきくよう
ありきくし鴻(こう)陰(いん)や水(みづ)路(ろ)くみきき
にきくく神(かみ)の代(しろ)の跡(あと)を残(のこ)しきく
海(うみ)安(やす)き波(なみ)のちりきく種(たね)と
おきく一回(ひと)ありきく苗(こゑ)代(しろ)水(みづ)と豊(とよ)なり
文(ふみ)陰(いん)陽(やう)の神(かみ)代(しろ)より今(いま)人(ひと)界(か)にあり

山(やま)行(ゆき)草(くさ)木(き)回(まわ)出(で)をきく神(かみ)代(しろ)五(ご)にあり
田(いり)あり現(あら)を古(ふる)しき子(こ)里(り)万(ま)里(り)の外(ほか)まで
も目(め)よりありきくやみ父(ちち)不(ふ)安(あん)を可(よ)も
わらきく神(かみ)回(まわ)初(はつ)の神(かみ)代(しろ)より文(ふみ)陰(いん)陽(やう)の民(たみ)
もききある天(あま)の村(むら)を種(たね)傳(つた)へきく万(ま)歳(さい)
のねを待(まち)とやきく比(ひ)も今(いま)長(なが)國(くに)を
れきく也(や)いしき春(はる)の氣(き)也(や)もきく

に^一去^二の^三田^四と^五入^六小^七何^八と^九我^{一〇}を^{一一}只^{一二}く
^{一三}花^{一四}ふ^{一五}少^{一六}と^{一七}は^{一八}る^{一九}成^{二〇}も^{二一}ち^{二二}り^{二三}に^{二四}い^{二五}わ^{二六}て
^{二七}苗^{二八}代^{二九}乃^{三〇}水^{三一}小^{三二}の^{三三}種^{三四}も^{三五}さ^{三六}く^{三七}散^{三八}を^{三九}室^{四〇}も
^{四一}や^{四二}傍^{四三}田^{四四}れ^{四五}雪^{四六}江^{四七}も^{四八}い^{四九}く^{五〇}さ^{五一}か^{五二}く

いふ是成翁と尋ねる事有りと
^{五三}れ^{五四}傍^{五五}と^{五六}る^{五七}に^{五八}小^{五九}田^{六〇}と^{六一}く^{六二}い^{六三}さ^{六四}る^{六五}あり

うふそくを立成小信のうきまあり
^{六六}い^{六七}ふ^{六八}是^{六九}を^{七〇}た^{七一}け^{七二}田^{七三}と^{七四}く^{七五}い^{七六}さ^{七七}る^{七八}あり

春の田と作しとて萬葉集の種あり
^{七九}わ^{八〇}の^{八一}水^{八二}口^{八三}小^{八四}み^{八五}千^{八六}串^{八七}と^{八八}く^{八九}あ^{九〇}る^{九一}あり

と立神主とすのうき種をいふ事
^{九二}は^{九三}谷^{九四}あり^{九五}と^{九六}や^{九七}水^{九八}口^{九九}小^{一〇〇}い^{一〇一}く^{一〇二}あ^{一〇三}る^{一〇四}あり

小田の種をいふ事
^{一〇五}小^{一〇六}田^{一〇七}の^{一〇八}種^{一〇九}を^{一一〇}い^{一一一}ふ^{一一二}あり

社王のうき種をいふ事
^{一一三}社^{一一四}王^{一一五}の^{一一六}う^{一一七}き^{一一八}種^{一一九}を^{一二〇}い^{一二一}ふ^{一二二}あり

五

力

美

3

人



2

13.

四

七

德

唯是祚ハ誓ハ人ハ事ハ新敷ハ出ハ没ハ

望世界也萬物以爲吾子而祚德唯

是乃社の神言也。然則一夫地乃

いささしりていし種蒔とよそ

是日前の

[illegible]

以今目前少也

海手撞とにあり苗代わく水

春雨の天よりくるま

て。回。ち。を。考。小。子。里。に。お。れ。と。し。

乃、料、也、凡、秒、成、者、入、撞、と、納、り

神徳有り有難言いふ有難言

聖言以爲
文天地開闢
首志。混沌未

新井 文政

シテハレコエ

ア、
地とあり

水是也、
陰陽相別きて、

精い、
あきとあり、

来世界ともあり、
あきといふ

こと、
玉名まり、

を、
あきとも、

や、
あきとも、

陽と、
あきとも、

此陽初、
あきとも、

四、
あきとも、

日、
あきとも、

地神、
あきとも、

又、
あきとも、

初、
あきとも、

皆、
あきとも、

此、
あきとも、

陽、
あきとも、

小、
あきとも、

河、
あきとも、

見、
あきとも、

中山皇孫。日向の國小判屋より

行以地伸才四乃火出見八門子也

生有子や王と保行

事。此。一。十。五。百。八。百。餘。歲。有。

かきくきこ
元ヲリ内ヲ下
王
さふ
リ
世
い
う

不
檢
視
と
聲
を
か
き
し
て
い
ふ
や
う
に
な
る

あまの神代もあまの国もあまの

實神の代りなるに10今も有る

叔津河の君のこけろ有難

下と名之乃雲の端小系以て

へうき橋の古をわく

上
 ともうき橋の古

と、
國をい
成との
紫乃
千
神歌

[illegible]

同上
下年
下

ちいさなうしろのま

海
神
今
白
波
の
流
る

字橋フナ
 工クリハの戸カギをカギしカギりカギ出カギすカギ

實今^{ワキ上}の世^切に

新成。以虛空子夜。非月。

新成爲

仁孝
孝
孝

いふは路に月雲の形も長閑あり緑のやまを

[illegible]

いふきの神と秘事也。上
活也。四帝亭

福より
 七つ五つ
 の神乃世
 九来今
 志れ

世より和を守護すの技藝を所傳に考へし

[illegible]

の厚端より、
ては出たか
少くも、あ
るといふ

か葉の千代萬代まゝとて運
ふあつてつる雪の深に恵みと
あつたれは賤し海老子の余前
あつてもいふ誰とてもへた
あつたれは非意くあつたる唐の世
あつたれはたのまのあつたる思
あつたれはあつたれはあつたる

くあつたれはあつたるあつたる
あつたれはあつたるあつたる
あつたれはあつたるあつたる
あつたれはあつたるあつたる
あつたれはあつたるあつたる
あつたれはあつたるあつたる
あつたれはあつたるあつたる
あつたれはあつたるあつたる
あつたれはあつたるあつたる
あつたれはあつたるあつたる

あつたれはあつたるあつたる

分ちてまじひが是の世なりとて
 入つておぼへ事ありとて
 清ま詣りては
 是の當
 今もはくちり長下ありとて
 の清まれり義式君さるる也
 おひ急ぐとて
 初使より向はて
 相違ふなり

さきも有鞠より久
事ハ諸委くに物終る
見るあまへ白地より下
當國のつらや前より荒鴉もと
よく執り候は彼鴉うつら
あつとをみるに於て
未だ寄持あり

卷之十一

事、心、採、入、鳥、類、畜、類、
執、貝、所

備わぬ神のちひ
雲舟と翔る如

かぐもあこひるゝ
盃てや

人知て
輕み
けよ

はるも
り
け
あ
や
非
袋

下
上
古
今
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

や
お備社の致景をカ
二面

滄海揚子北子青山南
飛鶴亭萊山

名震有七
性成
就凡仙
鄉

西子北村
岳跡年久

和物の所あり。是才

三乃社壇正一位勳一等化他力乃

智滿大菩薩之號一無佛世界土

今世に能く導く書を欲する

まの^典あふ^五其^五に^五神功皇后^五初

を^五満^五兩^五環^五の^五名^五珠^五と^五海^五底^五沈^五か

忽^五に^五新^五羅^五百^五濟^五の^五区^五賊^五と^五皆^五と^五く^五を

こ^五り^五て^五天^五下^五安^五全^五の^五國^五土^五を^五豊^五あ^五け

正^五昔^五時^五武^五天^五皇^五の^五神^五宇^五か^五よ^五大^五入

本^五の^五神^五皇^五さ^五い^五ち^五も^五さ^五定^五め^五た^五神^五と^五初

漢^五に^五あ^五り^五け^五た^五あ^五ま^五り^五及^五代^五の^五帝

ま^五の^五神^五德^五と^五あ^五ま^五り^五あ^五ひ^五さ^五や^五う^五く^五と

賜^五う^五に^五眞^五皇^五あ^五く^五崇^五め^五た^五ま^五り^五た^五れ^五と

ま^五の^五神^五前^五に^五あ^五り^五て^五ま^五り^五た^五ま^五り^五た^五れ^五と

ま^五の^五神^五德^五と^五あ^五ま^五り^五た^五ま^五り^五た^五れ^五と

ま^五の^五神^五德^五と^五あ^五ま^五り^五た^五ま^五り^五た^五れ^五と

ま^五の^五神^五德^五と^五あ^五ま^五り^五た^五ま^五り^五た^五れ^五と

ま^五の^五神^五德^五と^五あ^五ま^五り^五た^五ま^五り^五た^五れ^五と

ふに此の神祕を物に語らる其公

いにえまふ 今何もうつしき

吾れ所より年を経く有縁に元を

守るは神とやとてふらんや

くはオノ初ノ使ふまは言葉とる

いふやふれ月乃るえうに純の玉

廣くされまじく音の太へ木乃

神玉を号しへん此の地を意へ尋

玉殿の神と我とあり 見しは

を以て見しは 見しは 見しは

玉の神と我とあり 見しは

玉の神と我とあり 見しは

玉の神と我とあり 見しは

玉の神と我とあり 見しは

玉の神と我とあり 見しは

有縁や 玉の神と我とあり 見しは

乃言樂と奏に彼捕人を慰め
 たり人々を勅使さるる言樂とを
 奏しし言樂の役をさしむる及
 ばしに勅の使さるる言樂とを
 言樂と其言樂の言樂と安
 部の員任勅使して萬歲樂と
 あり事あり勅使して言樂と

乃言樂と奏に彼捕人を慰め
 たり人々を勅使さるる言樂とを
 奏しし言樂の役をさしむる及
 ばしに勅の使さるる言樂とを
 言樂と其言樂の言樂と安
 部の員任勅使して萬歲樂と
 あり事あり勅使して言樂と
 乃言樂と奏に彼捕人を慰め
 たり人々を勅使さるる言樂とを
 奏しし言樂の役をさしむる及
 ばしに勅の使さるる言樂とを
 言樂と其言樂の言樂と安
 部の員任勅使して萬歲樂と
 あり事あり勅使して言樂と

あみい階とのみくす前より
低くまねて立ちぬ庭上より
たまに神祇ともにならぬ女
ふまけに度難く結縁は
鳥類のふとくし佛早より
まじ宜み下と念みひけし及ハ尋
立ちて彼鳥と抱き海の上より

て教みえハ世鳥よりいひ羽をた
てて雲中より翔るひつら
遠の仲より死するぬえを死
和えて神徳をあらはし死
とるまじ神徳をあらはし死

下係之音曲先年白卷雖令

板門也散謠教番因有脫落之

進厥跡今亦後白卷因用板者也

章句声付不順誅意所可自

付之學士有效受歟南都伯以証之

貞亨三曆

丙寅

京都

吉田德共清滿正

西森六兵衛改春

江戸次原茂經芳春

霜月譜

